公開講演会記録

犬ぞり北極探査から見える北極環境の変遷

犬ぞり北極探検家　山崎哲秀

挑戦の人生の始まり

私は25年間にわたって北極に通い続けて、今では犬ぞりでの活動がライフワークになっております。今日は私がこれまでに実施してきた活動、そして北極に住む人々や自然、環境のことなどを織り交ぜながら話をさせて頂きたい思います。タイトルは「犬ぞり北極探査から見える北極環境の変遷」となっておりますが、決して硬い話ではございませんので、気軽に聞いて頂ければ助かります。

実は私は高校を卒業してからすぐに、こういった世界に足を踏み入れました。まずはそのきっかけから話をしないことには、このあとの話が繋がっていきません。きっかけは高校1年生の時まで遡ります。

当時、私は受験競争の激しい京都の高校に通学していたのですが、悩みを抱えながら過ごしていました。その悩みとは、「自分が本当にやりたいことは何なのか？」「周りの雰囲気に流されて受験勉強をして、目標のないままただ大学に進学してもよいのか？」あの年代では誰もが抱く悩みだと思いますが、私も同様でした。そんなモヤモヤした気分で生活していた高校1年生の終わりに、人生の転機となる一つの出会いがありました。

ある日、「冒険家、植村直己　アラスカのマッキンレー山で遭難！」というニュースがテレビや新聞などといったメディアで大きく報道されたのです。もともと植村直己さんのことは知りませんでしたし、山登りや、北極あるいは南極といった極地の世界も全く知らず、興味もありませんでした。ですからどうして連日大々的に報道をされているのかも分からないまま、植村直己さんとはどういう人なのだろう？と不思議に思っていたところ、たまたま立ち寄った書店で、植村さんの本を見つけました。

それは『青春を山に賭けて』という文庫本でしたが、手にとって1冊買って自宅に持ち帰り、読んでみたところ、高校1年生だった私はその本に衝撃を受けたのです。そこには植村さんが若い時代に世界中を放浪しながら各地の山々に登攀したり、また自然の中で何かに挑戦していくという、生き生きと生きる姿が描か

れていました。

「僕もなにか自然の中で挑戦したい」と強く影響を受け、いても立ってもいられなくなったのです。後のち気付いたのですが、どうやら私は思い立ったらすぐに行動に移す性格のようで、その本を読んだ翌朝から、通学前にランニングなどといった体力作りのトレーニングを始めていました。

そして高校を卒業すると同時に、すぐに行動に移りました。周囲の反対を押し切り、両親の元を離れて単身上京し、アルバイトをしながら山登りといった生活を始めました。そんな活動をスタートしてから半年ほどたったある日、１つの目標が頭の中に思い浮かびました。「東京から実家のある京都まで、１人で歩いてみたい」という目標でした。

そう思い付いたらいても立ってもいられません。翌朝からテクテクと京都に向かって歩き始めていました。この徒歩旅行は、東京から長野県松本市、そして新潟県の糸魚川に抜け、日本海側に沿って京都に歩いて行くという、７５０㎞の道のりを野宿しながらちょうど２週間かけての旅でした。

たった２週間という小さな目標でしたが、私にとってはこれが最初の挑戦だったのです。この徒歩旅行が終ってから気が大きくなり、また次の目標が頭に思い浮かぶことになります。「アマゾン河を単独でイカダで下ってみたい！」という夢です。

当時は植村直己さんの影響が大きく、もしかしたら植村さんも冒険したことがある、アマゾン河イカダ下りを、自分も出来るのではないかと思ったのです。そうなったらまたいても立ってもいられません。すぐに京都から東京に戻り、現場作業のアルバイトを徹底的にして、アマゾン河へ渡航する旅費を稼ぎました。

そして19歳の時、意気軒昂でアマゾン河へと乗り込んだのです。ところが最初に挑戦したアマゾン河イカダ下りには、大きな落ちが待っていました。イカダを作り、いざアマゾン河を下り始めたまではよかったのですが、なんと１週間もしないうちにイカダが急流に巻き込まれて転覆してしまったのです。

見事に１８０度ひっくり返り、せっかく貯めたお金もパスポートも所持品もすべて河に流されてしまい、私はといえば流木にしがみついて命からがらの状況です。日没が近づいてきて諦めかけていたところ、たまたま原住民の人が船で通りかかり救出されるというさんざんな結果でした。また多くの方たちにも迷惑をかけてしまったのです。

そんな状態で、本当ならもう止めようと諦めてしまうのが普通なのかもしれませんが、若さの勢いというのは恐ろしいです。なんと救出された直後に思ったことは、「もう一度挑戦してみたい」という気持ちでした。なんとか日本に帰国しまして、また現場作業のアルバイトを始め、資金を貯め直しました。

そして20歳。再挑戦です。この時は運よくもアマゾン河上流から河口までの約５０００㎞という道程を、44日間かけてイカダで下ることができました。年月が経ち、振り返ってみると、まだ自然の怖さも、当時の南米の治安の悪さの意味合いも分かっておらず、若さの勢いとしか言いようがありません。

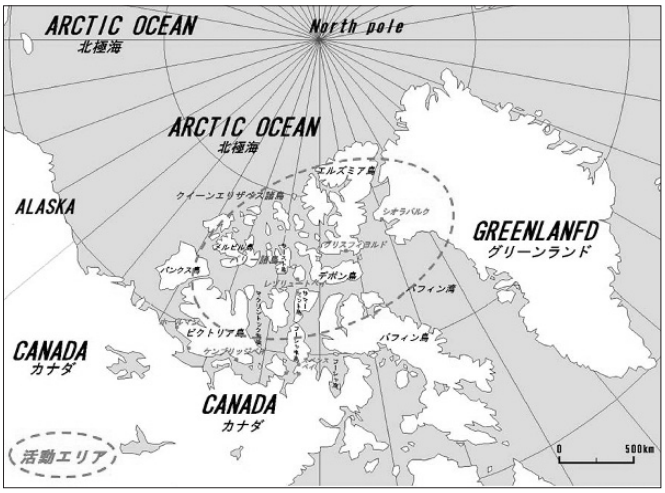
ただ、アマゾン河の自然は雄大で、大学では学べない何かを学んだような気がします。今でも記憶に残っている当時の私の心情があります。私の友人は皆、大学へと進学していき、自分はといえばそういった輪から完全に外れてしまい、落ちこぼれてしまっているわけです。ですが、何か目標に向かって挑戦していく、ということにすごく充実感を持っていました。

そんな心情を上手く表してくれている、その頃から大好きで、今でも挫けそうな時には力をくれる言葉があります。「みんなは私を　不可解なヤツと呼んだ　そして私の意志は　海だった」サン＝ジョン・ペルスという詩人の言葉で、まさに自分の目標、夢が海のようにどんどんとひろがってゆく、そんな充実感を持った、18～20歳の貴重な時間を過ごしました。

運命の地、北極へ

さてアマゾン河イカダ下りという冒険のあと、私の挑戦が終わるのかといいますと、やはりそういうわけにはいきませんでした。続行です。またまた次の目標が頭に思い浮かびました。アマゾン河とは正反対の自然環境の場所、「北極へ行きたい」という夢です。そうなるとやはりいても立ってもいられません。すぐに南米大陸から日本へ帰り、現場作業のアルバイトを徹底的に頑張って資金を貯め、21歳の時に初めて北極へ足を踏み入れました。

その動機はといえば、「北極にある氷に覆われたグリーンランドという世界最大の島を一人で歩いてみたい」という夢でした。グリーンランドは日本の7～8倍の面積を持ち、その大半が氷に覆われています。島の中心部では氷の厚さは3000mを越える極寒の島です。そんな氷の島の内陸部を北から南まで単独で歩いて縦断してみたい、という想いからでした。その頃の私はまだ植村直己さんの影響が大きく、「個人的な冒険心」から極寒の地を訪れたのです。



北極圏地図

ところが初めて足を踏み入れた北極ですが、これにもアマゾン河同様に大きな落ちが待っていました。生涯で初めてマイナス40℃という気温を体験するのです。いざ野外でテントを張り、活動してみようとしたところ、あまりの自然の厳しさに何も出来ず、手も足も出ませんでした。ただ自然への恐怖心を抱くばかりで、日本に逃げ帰った、というのが私の北極活動のスタートラインでした。

ようやく、こういった厳しい自然環境の中での活動方法を教えてくれる先生が必要だ、と気付くのですが、そこで私がとった方法は何千年という大昔から北極地方の自然の中を生き抜いてきた「エスキモー民族」に弟子入りして、活動方法を学ぶことでした。

逃げ帰って以来、私の北極通いが始まりました。雪と氷が溶ける夏期のシーズンは、日本で現場作業のアルバイトを徹底的にしてお金を貯め、冬になるたびに毎年毎年通い続け、活動方法を身につけていきました。そしてようやく、これからも北極でやっていけるぞ！と手応えを掴んだのが、なんと10年間通い続けてからだったのです。

その頃には、自分の北極活動においての志向、方向性が見えるようになってきました。30歳を境に北極活動に転機が訪れます。まずは「犬ぞり」を北極での活動手段に取り入れたこと。これは、北極

に通い続け、エスキモー民族の冬の交通手段である犬ぞりを見ているうちに、理にかなった移動方法だと分かったからです。歩くのは持ち運ぶ荷物も制限があり、1日で動ける範囲にも限りがありますが、犬ぞりは歩行よりもスピードがあることや、ソリに多く荷物を積載できることで、活動範囲が格段と広がるのです。

そこでエスキモーの人々から、犬ぞり技術を伝承してもらい、自分の活動手段とすることが出来ました。またちょうどこの頃、それとは別に、北極や南極といった極地で観測調査をする日本の研究者の方たちとの出会いが、北極活動の方向性、志向を見つけることにも繋がりました。

犬ぞりチーム

30歳代の10年間には、北極での観測調査に何度も参加させて頂き、また南極観測隊にも越冬隊員として参加させて頂いたことでそれが確実なものになりました。私が持った北極活動の方向性、志向とは、身につけた犬ぞりという活動手段と観測調査を合わせて北極に取り組んでいこう、というもので、実際に研究者の友人と共に、犬ぞりを利用しての観測調査を繰り返し、40歳以降の北極活動へと繋がっていきます。

北極に住む人々と自然

さて、ここで北極に住む人々や自然のことを紹介したいと思います。私の北極のホームグラウンドは、グリーンランド北西部地方の北緯75～80度にあたる地域で、主にその周辺の話になります。

緯度が高い極北といわれるその地域にも夏があります。3か月ほど（緯度によっては4か月ほど）白夜となる極北地方の夏は、気温がプラス以上にもなることもしばしばで、広い範囲にわたって海氷は溶け、海が広がります。陸地にあたる場所では、草花が咲き乱れますし、冬の雰囲気とは随分と異なります。

いっぽう冬はマイナス30～40℃に気温は冷え込み、海に氷が敷き詰められます。通常では11月になると20、30㎝と海氷の厚さは増していき、その上を犬ぞりでも走行できるようになりますが、近年は温暖化の影響で結氷する時期が一定しなくなってきています。夏の白夜とは正反対で、一日中太陽が顔を出さない、極夜といわれる期間が3か月ほど（これも緯度により期間が異なる）続く極端な季節です。

夏季と冬季、このような両極端の自然環境の極北地方ですが、アラスカからカナダ北域、そしてグリーンランドという広域にわたり、エスキモーという先住民族が、何千年という大昔から厳しい北極の自然の中を生き抜いて過ごしてきました。私たち日本人とは容姿もそっくりで、遺伝子的にも近く、民族としての繋がりも深いと言われています。

北極と言えば、極寒の自然が広がる、厳しい殺伐とした環境を連想しますが、思っている以上にたくさんの生物が棲息しており、それらの動物などを狩猟しながらエスキモー民族の人々は生き抜いて

きました。

彼らは野生動物の乱獲はしません。あくまでも自分たちの生活に必要な分しか狩猟はしません。それによって獲物の対象となる野生動物は増え過ぎず、減り過ぎずといった具合で、人間界と自然界の調和が上手くとれた、生命力が溢れる場所として25年間北極を見続けてきました。

つい半世紀ほど前までは、竪穴式住居、あるいは毛皮を利用したテント、雪の家として有名なイグルー、などを住居として原始的な生活を営んでいたエスキモー民族ですが、今では普通の木造住宅に住むようになり、時代と共に彼らの生活も変貌してきました。もともと少数家族で、生活のしやすい場所を探しながらの移動民族だった彼らも、いつしか村や町を形成して集団生活を営むようになりました。生肉を中心とした食生活でしたが、今では小さな村でも必ず1軒は、政府が経営するお店があり、最低限の食料品や生活用品が手に入る時代になりました。

またそれぞれの居住地域に関係する国々（アラスカはアメリカ政府、カナダ北極はカナダ政府、グリーンランドはデンマークの自治領となっておりデンマーク政府）から、生活保護も受けるようになりました。それによってアラスカやカナダ北極のエスキモー文化は、あっという間に衰退の一途を辿りました。グリーンランドに関してはデンマーク政府が過度な保護をしなかったせいか、未だに根強くエスキモー文化が残っているのですが、個人的に思うのは、過保護は民族の文化を崩壊させてしまう、ということです。領土権を主張するために、エスキモー民族を取りこむ必要があった、という見方も出来ますが、もう少し順序だてて先住民族に接していって欲しかった。保護のやり方が、あまりにも急速過ぎたのでは、と感じないではいられません。

拠点のシオラパルク村

北極の自然環境

我が国においては東日本大震災のあと、電力問題がクローズアップされています。人々の生活を一変して便利にするもの―電気。私は25年間北極に通い続ける中で「電気・電力」が、大きな役割を果たしているように感じます。

1つの例を紹介しますと、グリーンランドの北緯78度付近にあるシオラパルクという小さな村では、私が最初に足を踏み入れた25年ほど前にはまだ電気がなく、住民はランプにたよる、かなり原始的な生活を営んでいました。ところがしばらくしてからその村に発電設備が整い、北極最北のエスキモー部落に歴史的にも初めて電気が灯りました。

電気を使うようになってから、その小さな村は5年も経たないうちに一変してしまいました。テレビや洗濯機、冷蔵庫といった家電製品が、1家に1台備わる時代になったのです。今ではインターネットも普及していますし、なんと携帯電話も1人1台持つような時代へと変貌を遂げました。電気の力を感じないわけにはいきません。

またこのような急速な移り変わりを見ているうちに、便利な生活を手に入れることは、大きなリスクも兼ね備えているのだと感じるようになりました。そのリスクとは何か？ 人間の手により、自然

環境を壊していくことにも繋がるのだ、ということです。

実は広大な北極地方も、人間の手による自然破壊問題を抱えています。「ゴミ問題」です。アラスカからカナダ北極、グリーンランドには、ゴミ処理施設が一つもありません。どう処理されているかといえば、人が住む村や町から少し離れた片隅に、どんどん投棄されているのが現状です。年々見るたびに、不燃廃棄物や燃焼されたゴミの山が増え続けるばかりという光景を、人が住む村や町では必ず目にすることが出来ます。

投棄されたゴミ

現代は、環境問題から目をそらすことが出来ない時代です。ただ、個人的に考えるのは、一度便利な生活を手に入れてしまうと、もう不便な時代、極端にいいますと原始的な時代に戻れる人は殆どいないと思います。そういった中で私は、今の環境を維持していくことが重要だという気がするのです。それには1人1人の意識の積み重ねと、身近に出来ることから取り組んでいく必要を感じます。目をそらさず、私たちの時代からは環境問題にも目を向けていきたいと思っています。

もう1つ北極の温暖化についても触れておきたいと思います。近年、地球の温暖化問題がクローズアップされていますが、私が25年間北極を見続けてきた中でも、やはり身近に温暖化を体感することがあります。何にそれを感じるかと言いますと、いたってシンプルで、冬になっても海の水が凍りにくくなったのです。

8年ほど前に、実は私は大きな事故に遭遇しました。北極で一番寒い1月から2月の季節に、それまでは割れるはずのなかった地域で海氷が割れ、犬ぞりチームを流失させてしまいました。私は何とか陸地に逃げることが出来たのですが、その当時、活動を共にしていた13頭の犬たちを陸地に誘導出来ず死なせてしまったのです。数分間違っていれば、私も共に流され命を落としていたでしょう。何とも悲しい出来事でしたが、この事故に遭遇し、「あっ！10年、15年前の北極の自然環境とはどうも違うぞ」と痛感したのです。それ以来、温暖化にも目を向けるようになりました。

地球温暖化により、北極域は注目を浴びる場所となりました。北極海航路の可能性や、これまで確認されていた北極海海底にある油田や天然ガスなどといった地下資源開発を巡って、北極海を取り巻くロシア、アメリカ、カナダ、デンマーク（グリーランドはデンマークの自治領）などといった沿岸諸国が、これまで設定されていなかった領海権を主張するようになったのです。

北極航路は、歴史的には１５００〜１８００年代に、ヨーロッパ諸国が北極海を通り、アジアへの近道、貿易航路として開拓、探査された時代がありましたが、当時は北極海の海氷は分厚く、船舶を寄せ付けませんでした。近代は貿易航路以外にも、大型船による資材搬入なども含め、北極海開発の意味合いも加わったのでしょう。

また我が国の尖閣諸島問題と同様に、

小さな島を巡り、隣国どうしの領土権主張も繰り広げられており、政治的、ビジネス的にも北極は今、非常に熱い場所となっています。

現在の北極域で私が出来ること、取り組んでいること、今後の目標

２００６年から私は「犬ぞりによる北極圏環境調査」という名目で、個人で活動を続けております。あくまでも自分で出来る範囲でのものです。10年、20年と北極で活動を続けてきた中で、近年になり地球の環境問題が注目される時代になり、自分も何か１つでも環境への取り組みに参加したいと考えるようになりました。

そして自分に何が出来るか、と考えた時、自分の手の中には北極しかありませんでした。身近にある北極で何か１つでも出来る活動をしていこうと始めたのが、現在取り組んでいる「犬ぞりによる北極圏環境調査」です。いくら地球温暖化とはいえ、今でも真冬の北極はマイナス40℃、50℃というような環境です。その厳しい自然の中で活動できる研究者はなかなかいません。たまたま私は活動の幅を少しだけ広く持っていますので、その中で取り組んでいこうということです。

日本の研究者の方々から、出来る範囲の課題を頂き、データを収集して記録し、日本に持ち帰り提出する、という活動をボランティアで継続しております。当初は10年計画で始めた活動でしたが、間もなく経とうとしている10年間では、とても時間が足りないことが分かりました。やはり北極は広大です。今後も15年、20年と少しでも長く現役を続け、活動を継続していきたいと思っております。

これらの北極活動を将来、もっと大きな形として構築していきたいという、今後の目標、夢があります。最後に４つほどそれらについて述べさせて頂きたいと思います。

海氷を採取

①日本の北極観測における民間支援体制の組織

南極地域の観測隊は国家事業として大々的に実施されている観測調査で、我が国は世界にも引けをとらないトップクラスの観測を継続しております。大先輩方がそれを構築して下さったのです。ところが北極観測はと言いますと、日本は世界からも遅れをとっている感が否めません。何とか日本の研究者の方たちが今後、北極で観測調査を安全に実施するためのサポート体制を作りたいと思っています。

②グリーンランド極北域とカナダ極北域にそれぞれ、日本の観測拠点を設営する（民間企業からの設営費用、賛助金獲得を目指す）

先ほどの話に繋がっていくのですが、我が国が継続的に北極域観測調査を実施していくにあたり、観測拠点の必要性を感じます。例えば極地観測からみた地球科学においては、南北両極における同等な観測によって信頼度が増すはずであり、対応する観測体制の確立が必要と感じるわけです。科学研究費

等の公的補助金のみをあてにした計画ではなく、民間から何とか設営費用、賛助金を獲得したいと考えております。

口では簡単に目標を掲げることができますが、この計画を実現するには一民間人の言葉では説得力に欠け、どうしても研究者の方々の力添えが必要となります。まずは研究者の皆様の、北極観測に対する意志と意欲が不可欠です。どこまで実現するか、出来るかは取り組んでみないと分かりません。おそらく10年、20年という時間と根気が必要となるでしょう。

③エスキモー民族と日本の交流の促進

エスキモー民族と私たち日本人は遺伝子的にも関わりが深い民族であると述べましたが、にもかかわらず、これまでに私たちとエスキモー民族との交流が全くないのです。何とか姉妹都市、あるいは友好都市などといった両民族間の交流を実現していきたいものです。

④エスキモー文化の継承

時代と共に衰退していく一方のエスキモー民族文化ですが、その中で私は彼らから、古来の文化である犬ぞりという技術の伝承を受けました。また北極の自然を生き抜いていく技術も伝承されました。何とかこういった彼らの文化を継承してきたい、次の世代にも残していきたいという想いです。

よく周りの皆さんから、北極の厳しい自然の中での活動は難しく大変でしょう、と声をかけて頂きます。確かに厳しい北極の環境の中で活動するのは難しく厳しいものです。しかし私にとりまして、それ以上に難しいと感じていることがあります。それは何かと申しますと「継続すること」「モチベーションを保ち続けること」のほうが私にとりましては、遥かに難しいのです。25年間北極に通い続けてきた間には、挫けそうになったり、気持ちが折れてしまいそうなことがしばしばありました。もともと北極に足を踏み入れたきっかけは、「個人的な冒険心」からでしたが、継続して北極で取り組むうちに、日本を感じるようになりました。私は自分が生まれた日本が限りなく好きで、誇りを持っております。40歳を過ぎた頃から個人としての北極ではなく、「日本と北極の関わり」を強く意識するようになりました。北極は決して日本とは無関係な場所ではありません。

何とかこれらの目標、夢を少しでも実現できるように、今後の私の人生という時間を北極活動に捧げていきたいと思っています。

（２０１４年7月25日・フォーラム）

講師略歴（やまさき　てつひで）

犬ぞり北極探検家

１９６７年　兵庫県生まれ。幼少期は福井県高浜町。

１９８８年　洛南高校（京都府）卒業

アマゾン河イカダ下り単独行

１９８９年以降　北極圏（主にグリーンランド）遠征を繰り返し、エスキモー式の犬ぞり技術や狩猟技術を継承。

北極圏での数々の観測調査遠征をはじめ、第46次日本南極地域観測隊（越冬）に参加。現在は犬ぞりによる「アバンナット北極圏環境調査プロジェクト」に取り組んでいる。

（社）日本雪氷学会会員。

２００９年　南極倶楽部会員。

第４回モンベルチャレンジアワード受賞。

２０１１年　（財）ソロプチミスト日本財団、環境貢献賞を受賞。